０５／０９／０４　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：揺るがされぬ生涯を送るために　８
聖書箇所：ピリピ人への手紙　４章４－９節

このピリピ４：４から学びを始めたのはちょうど１年前の９月５日でした。初めはこれだけ長い時間をかけるつもりはなかったのですが、学びを進めて行くうちにここに書かれていることの大切さ、また、そこで教えられていることの深さに、私自身がいろいろなチャレンジを受け教えられたように思います。今日は皆さんといっしょに先週見ることのなかった９節の最後を見るつもりですが、４節のところから順にもう一度振り返りながら、今まで学んできたことをおさらいして、最後にパウロが私たちに教えることを学んだ上で、平安に満ちた生涯がどういうものか、そのことについて考える時間がもてることを願います。

この学びをして行く中で、いろいろな情報に目を向ける機会があったのですが、その中のひとつにこのようなものがありました。アメリカのある有名な大学の研究室でひとつの研究がなされました。それは「平安な思い」に関するものです。この研究によると、精神的または感情的に不安定な人たちというのは、次のいくつかの特徴が見られるというのです。（１）疑いをもったり恨みをもって生きている。別の言い方をすれば、彼らは他の人たちがしたことに対する恨みをずっと募らせながら、それに思いを寄せながら生きていると言います。（２）彼らは過去に生きている。いつまで経っても以前に起こったことを思い続け、そこから離れることができないのです。現状を見つめるのではなく、過去のことに思いを寄せ続けるのです。（３）自分が変えることができない状況に対して、非常に多くの時間と労力を使ってそれを変えようと戦い続けている。（４）自分が現在生きている世界から何とか逃れようと努めている、簡単に言えば現実逃避をしている。いろいろな困難がやってきたとき、そこにしっかり留まって解決を見出そうとするのではなく、どうやって逃げ出すことができるのかということに一生懸命になるのです。ある人たちは実際に消えていなくなってしまうかもしれません。またある人たちは自分の心の中で現実逃避をしようとしているのかもしれません。（５）彼らは厳しい状況に陥ったとき自己憐憫に没頭する。（６）自分自身に期待し過ぎる。ある目標を設定するが、それが自分の限界をはるかに越えているにも関わらず、そこに到達できると自分に期待を持ち続けるゆえに、実際にそれができないとき落胆する。（７）自分以上に偉大な存在をもっていない、自己中心的な人たち、自分ですべてができると考える、自分以外にすばらしいものはいないと、そのような生き方をしている人たちです。同じテストの中で出てきた結果の一つに、自己中心的な人たちは幸せを計るテストに常に低い成績を収め続けたと言います。これを見ながら非常に興味深く感じました。特にピリピを学んでいる中でそのように思いました。なぜなら、今ここに上げた七つの事柄すべては、ピリピ４：４－９に書かれているパウロのことばによって解決するからです。精神的、感情的に不安定な状態に陥り易い人たちのもっている特徴は、もし、その人たちがここに書かれていることをしっかり実践することができるなら、不安定さをもたずに生きることができる、その解決方法を私たちに与えてくれるからです。

ときに私たちの人生は私たちに厳しい対応をします。強風が吹いたり、大きな荒波に揉まれてしまって足が揺るいでしまう、ある人にとってはこのような困難は余りにも大きすぎるために、もう私は生きて行くことができないと考えて、自らのいのちを絶つことがあります。また、ある人たちはそのような困難が原因で自分の生きている人生を憎み、他の人たちを憎むという、そのような生き方をすることがあるかもしれません。多くの人たちはそのような困難な状況の中にあって、肯定的な前進的な人生の見方をすることができず、私は何とかわいそうなのかという思いに駆られ、憤りを覚え怒りに満ち、落胆します。確かに、そのような感情的、精神的なショック状態は、個人個人によって、また置かれている状況によって違うかもしれませんが、まちがいなく言えることは、そのような状態に陥っているときにその人たちのうちには平安がないということです。私たちはだれでもそのような体験をしたことがあるはずです。

技術的な革新、より高度な教育、経済の成長など、様々な事柄によって私たちはより平安な生涯を生きることができると考えてきましたが、今現実に、人々は平安な生涯を送るのではなく、むしろ、恐れと不安に満ちた生涯を送っているのです。自然災害から、日常に起こる様々な細かいことに至るまで、多くの事柄が人々の心を恐れと不安に満ち溢れさせます。けれども、そのような中にあって神は私たちにある約束をしてくださっていました。それは、神を信じる者、クリスチャンには平安が与えられているという約束です。このことをイエスはヨハネ１４：２７で弟子たちに教えました。**「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」**。また、パウロはガラテヤ５：

２２で御霊の実を記していますが、その中に「平安」が含まれています。神を信じる者たちは平安に満ちた生涯を送ることはできると神はいわれるゆえに、私たちはいったいどのようにしてそのような人生を歩むことができるのかということを、このパウロのことばを通して学んできたのです。このピリピ４：４－９を再度振り返って見ることによって、私たちがどのようなことがあっても決して揺らぐことのない確実な平安に満ちてこの人生を歩んで行くために、何をして行かなければいけないのかを学んで行きます。願わくば、この学びを通してこのみことばに出会うたびに、いろいろな困難に立ち向かうたびに、神にあって与えられているこの平安というすばらしい祝福を体験しながら生きて行くことができるように、そうなれば何とすばらしいことか、そう思います。

4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。
4:5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。
4:6 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。
4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。
4:8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。
4:9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。

☆平安に満ちた生涯を送るために

Ⅰ．必要な条件　　４－６節

この条件の中には三つの要素がありました。

１）聖書的な喜びをもつ　　４節

これは私たちが幸福であると感じることではありません。この幸福というのは現在与えられている状況に基づいて、私たちがそれに満足する、または、それに喜びをもつかどうかということに係っています。それは計画できません。与えられている状況の中で私はそれをどのように捉えるのかが幸福感につながっているのです。神が命じておられることは「喜びなさい」です。また、聖書的喜びは私たちの感情にも支配されません。感情的にいつも喜んでいることは不可能です。悲しいときに感情的に喜ぶことはできません。神はそれを求めているのではありません。では、聖書的喜びとは何だったのか、その定義を覚えておられますか？それは神との関係に関わっていることです。その関係があるがゆえに、私たちはどんな状況にあっても喜びをもつことができるのです。定義「喜びというのは感情ではありません。それは神が信徒の最善のために、またご自身の栄光のために、あらゆる事柄を完全に支配しておられるというその事実に対する、心の奥からの確信である。それゆえに、どんなことが起こったとしてもすべては万全であると言うことができる。」、ここに聖書的喜びは基づいているのです。イエス・キリストによって神との和解が与えられた私たちには、たとえその人生にどんなことが起こったとしても、ひとつだけ確実に言えることがあります、すべては万全であると。なぜなら、私を愛してくださり私を贖ってくださったイエス・キリストがおられることを知っているからです。神は私にとって最善のことをしてくださるから、たとえ今私に理解できないような苦しみ、悲しみ、困難があったとしても、「大丈夫、すべては万全であるから」と言うことができるのです。

２）寛容な心を持つ　　５節

他の人たちの手によって与えられる様々な困難に忍耐をもって耐えるということです。キリストはこのことを自らの生涯のうちにしっかり現わし私たちへの模範としてくださいました。Ⅰペテロ２：２１－２３を見るとこのように書かれています。**「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」**と、これがキリストが示してくださった模範です。寛容な心です。私たちは多くのときに、私に対してこんな仕打ちをした人に対して、私がこのような行為をしたとしても当然だと言って、その当然な事柄を求めようとします。けれども、そういう思いを持てば持つほど、私たちの心はどんどんすさんだものになって行きます。どんどんいらついてきます。ある一人の注解者はこのことをこのように言っています。「本当の祝福とは、私にはこれがふさわしいと思う事柄、それがたとえ何であったとしても、それを一所懸命追い求め続ける人には与えられることがない」と。またある人は、相手にそのようなことはしないけれど、もうその人とは関わるのは止めようと思うかもしれません。でも、いつまでもそのことを覚え続けるからそれも同じこ

とです。そのうちには憎しみや怒りがあるのです。けれどもパウロがここで教えることは、単に忍耐しなさいということではありませんでした。寛容になりなさいではなく、寛容な心をすべての人に知らせなさいでした。どのようにしてでしょう？それは私たちに対して悪いことをする人たちに対して、その人たちの最善のために愛の行為を実践することによって現わすのです。神は復讐はわたしのものだと言われます。ところが私たちは言います、いいえ、私が復讐するのです、被害をこうむっているのは私ですからと。正しくさばくことができるのは神だけです。何かいやなことを人にされたとき、その人が何を思ってそれをしたのか、私たちはどれほど知っているでしょう？勝手に想像しますがそれは正しいでしょうか？神は言われます、悪に対しては善をもって報いなさい、あなたの敵を愛しなさいと。しかし、私たちがそのようにしないからいつまで経っても私たちの心には平安がないのです。平和を作る者ではなくてそのような憎しみのゆえに平和をこわすものになっているのです。だから、聖書的な喜びをもつこととともに忍耐深いその心が平安をもつために必要なのです。

３）<u>人生に対して正しく対応して行く</u>　　６節

パウロは二つの命令をもってこのことを説明しています。「思い煩うな」と「あなたの願い事を神に知っていただく」ということでした。思い煩うなというのは、私たちがあらゆる思い煩いを捨てるということではありませんでした。良い思い煩いと悪い思い煩いがありました。神の前に正しい心配、私たちがしなければいけない心配と、してはいけない心配です。ピリピ２：２０でパウロはこの「思い煩う」と同じことばを使っています。**「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを<u>心配して</u>いる者は、ほかにだれもいないからです。」**、テモテとパウロはピリピの人たちのことを心配していたのです。しかも、これは良いことだとしています。兄弟姉妹のことを心遣い彼らに最善が与えられることを願い、どのように彼らを守ることができるのかと考え過ごすこと、それは悪いことではありません。実際にⅠコリント１２：２５を見るとパウロはコリントの教会に命じています。**「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。」**、互いのことに心を配り合いなさい、彼らの成長のためにあなたの賜物を用いて行きなさいと言うのです。私たちは正しい思い煩いがあることを覚えておかなくてはなりません。家族のために愛する兄弟姉妹のために、私たちが様々なことに思いを巡らし心を配ることは悪いことではないのです。

では、パウロが禁じていることは何でしょう？パウロが言っていないこと、それは私たちが思い煩いをしなければならないようなプレッシャーがいっさいなくなるということです。いろいろな困難が起こって私たちは心を配ります。いろいろな状況が起こって心配します。その状況がなくなるから私たちは思い煩わなくてもいいと言っているのではありません。Ⅱコリント１１：２３－２８にパウロは自分が受けてきた様々な苦難、迫害を列挙しています。**「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。:26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、:27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。:28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」**。これらの最後に、これが最も大きな苦難であるかのように、愛する教会の人々への心づかいについて記しています。パウロは心配のゆえに眠れない夜があったのです。あの兄弟はどうしているだろう？あんな苦しい状況の中にあって迫害を受けているあの教会はどうだろう？罪を犯していたあの兄弟はちゃんと立ち返ることができただろうか？と。そういう心配りがあったのです。パウロがここで言っているのは間違った心配です。

では、どのような心配、思い煩いが間違っているのでしょう？パウロが言うのは、私たちが人生の事柄において正しい焦点を失ってはいけないということです。マルタとマリヤの話をしました。マリヤはイエスがやって来られたとき、イエスの膝元で熱心にみことばを聞いていました。マルタは給仕に走り回っていました。マルタはイエスにマリヤに何とか言ってくださいと願います。そのマルタにイエスは本当に思い煩わなければいけないことは一つだけです、心が分かれてはいけないと言われました。ルカ１０：４２**「しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」**と、その状況の中でもっとも必要だったことは、マリヤのようにイエスのことばに耳を傾けることでした。マルタは周りの状況に捕らわれてそこにしか目が向いていなかったのです。また、種まきのたとえがあります。その中の一つはこんな状況を示していました。福音の種は蒔かれたけれど、この世のことに思い巡らしていたゆえに成長することができなかったのです。マタイ１３：２２**「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」**。パウロがここで命じている**「何も思い煩わ**

ないで」というのは、私たちがいろいろな困難があったときに、神に目を向けることを忘れてしまいこの地上のことにのみ目を向けた、そのような状態のことを示しているのです。そして**「あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」**と言います。それが人生に対する正しい対応であると。

祈りというのは神に私の必要を知ってもらうためにあるのではありません。神は私の必要が何であるかを私以上に知っておられます。ではなぜパウロは**「あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」**と言うのでしょう？それは祈りを通して、その祈りを聞いてくださり、私たちを助けてくださる神に依存しようとするのです。神に信頼を置くのです。何が起こるのか予期することができない不確定な人生の中にあって、すべてを支配しておられ、私たちの最善のためにそれを用いてくださっている神に目を向けなさいと言うのです。祈りと願いによって、感謝をもって…。感謝をもった態度というのは、私たちが完全に私たちの主に信頼していることの証明です。ある一人の注解者はこう言いました。「クリスチャンにとって置かれている状況の中で、特定の感謝をしたいと願う事柄が見つからなかったとしても、クリスチャンは常に過去に神がなさってくださったすばらしいみわざの数々を覚え、今現在も与えてくださっている祝福を知っているがゆえに、また、それ以上に、すべてのことを私のために最善をなしてくださっている方を信頼しているゆえに、感謝に満ちた祈りをささげることができる」と。また、別の注解者はこう言いました。「人々は不安を抱き心配し恐れをもつ、それは彼らが神の知恵、力、また、神が良い方だということを信頼していないからだ。彼らは神が彼らの人生に災いが起こるのを阻むことができるほど賢くなく、力強くなく、善を為してくださらない方だとそう考え恐れる。感謝に満ちた祈りというのはこのような恐れや不安から私たちを解き放ってくれる。なぜなら、その祈りは神が主権者でありすべての状況を支配しておられ、神ご自身の目的に沿って、信徒一人ひとりの最善を為してくださっていることを理解する祈りである」と。

皆さんは感謝をもって祈っておられますか？私たちが神がだれであるかを十分理解し、それに則して、私たちが人生に起こる様々な事柄に対応して行くとするなら、私たちはこの地上に起こっている問題にだけ目を向けるのではなく、そこからむしろ目を上げて神を見つめ「神さま、ありがとうございます。私にはなぜこのような困難が起こっているのか分からないけれど、神はこのことを通しても私に必要な最善のことを為してくださっているから感謝します。すべてをあなたにお委ねします。」と言うのです。そのとき私たちの心には平安が出て来ます。

Ⅱ．神の約束　　７節

平安に満ちた生涯を神は約束してくださっています。７節**「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」**とこれが約束です。私たちの多くは私たちが考えている最善のことが起こらなければ、私は平安が与えられないと思います。私の祈りが答えられなければ、そこには喜びがやって来ないと。もし、私たちがそのような生き方をしているなら決して平安を得ることはできません。なぜなら、私たちの知識は余りにも限られているから、私が最善と思うことは決して最善ではないのです。本当の平安は、神が私に必要だと思っておられることが私の人生に為されるときに私のうちに与えられるのです。神が与えようとしてくださる平安は神の目的が達成されるときに行なわれます。神は事実、すべての事柄を私たちのために為してくださっています。それゆえに私たちはすべての不安、恐れを神に預けることができるのです。この神の平安は神の特徴に基づいているものです。神の偉大なる力、知恵、主権に信頼します。先にあげた三つの必要条件を満たすことができる人は、間違いなく神がどのような方であるのかということに信頼を置いています。だから、その人には約束が与えられているのです。平安がある、そして、その平安はあなたを守ってくれると。私たちが様々な困難の中で平安を得て行くために必要なことを、ある注解者はこのようにまとめています。「私たちが平安に満ちた人生を送るためには、あらゆる私たちに不快感を与える事柄を取り除くことではありません。無限な知恵をもってきよく主権者であり偉大な力をもった神が、すべての困難の中で神の最善を為してくださっているということを信頼することにある」と。

Ⅲ．実践　　８－９節

このように約束されている平安を継続的に持ち続けるために、どのような歩みをするのか、二つのことを教えています。

（１）<u>正しくものを考えること</u>＝パウロの命令を見ると、８節に**「心を留めなさい」**とあります。考えなさい、計算しなさいということばです。残念ながら、私たちの知識、理性、考え、思考というのは罪の影響によって正しいものではありません。また、私たちの感情は正しい考えの邪魔をします。私たちはよく言います、「もうお先真っ暗！」と。それがクリスチャンであるならよく考えなければなりません。確かに、そう思うときがあるかも知れませんが、本当に先は真っ暗なのでしょうか？みことばはそれを

教えているでしょうか？むしろ、私たちの先には輝くばかりの神の栄光が待っているのです。クリスチャンはそのように言わなければいけないのです。私たちが正しくものを考えたときその結論が出て来ます。どのようなことを考えるのか、詳しいことが８節に記されています。**「すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値すること」**について考えるのです。

（２）<u>正しく生きること</u>＝正しい考えに基づいて正しい行動を取って行くことです。パウロは言いました。９節**「私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。」**と。正しい考えを持つだけでなく、私たちは正しい歩みをして行かなければならないのです。みことばに教えに沿って。私たちは落胆の中に沈み続ける必要はないのです。そして、そのように聖書的に正しく歩んでいる信仰者たちの模範にならって行きなさいと教えています。イザヤ３２：１７に**「義は平和をつくり出し、義はとこしえの平穏と信頼をもたらす。」**とあります。神のみことばに沿って歩んで行くときに義は生まれ私たちは平安を与えられます。私たちが主の前に従順に歩んで行こうとする信仰の模範にならって歩んで行くときに、私たちの人生には義なる生活が生まれ、その義は私たちの心に平安を与えるのです。そのような歩みなくして私たちは決して平安に満ちた生涯を送ることはできないのです。

Ⅳ．保証　　９節

最後に、パウロは９節の終わりで私たちにもう一つの約束を与えてくれます。でも、私は約束というよりパウロが記すことばを保証と言いたいと思います。条件の最後にパウロが約束を与えたように、実践を記した後にパウロはもう一度私たちに平安に満ちた生涯を送ることの約束、保証を与えるのです。パウロはこう言います。**「平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」**と。なぜパウロは７節で「神の平安」と言ってここでは「平和の神」と言っているのでしょう？この「平安」と訳されていることばも「平和」と訳されていることばも原文では全く同じことばです。そこでは、二つの違った強調点があるのです。７節では、神が造り出す、神から与えられる平安のことですが、９節の「平和」はそうではなく、７節にあるその「平安」の源である、その平安を造ってくださる神があなたとともにいてくださるということを言っているのです。私たちに与えられるのは平安だけではないのです。神はご自分の手で「平安」を私たちにもってきてくださり、その平安によって歩み続ける私たちといっしょにいて、ともに歩んでくださるのです。誤解しないでください。パウロはここで私たちがこのような歩みをしなかったなら神は私たちとともにいませんと言っているのではありません。神はどこにでもおられる遍在の方ですから。けれども、私たちがこのようにみことばが教えることを実践し、そのことに思いを巡らし正しい考えをもって生きて行くとき、神は私たちに好意的にともにいてくださるのです。平安を与えるというすばらしい祝福のうちに。未信者とも神はともにいてくださいます、敵対関係において。罪を犯しているクリスチャンに対して神はむちをもって横におられます、懲らしめの杖をもって、正しい道を歩むことができるように。従順に神の前を歩んで行く者に対して神はその大きなつばさを広げて、私たちを守りつつ歩んでくださるのです。パウロはそのことを言っているのです。

この箇所を学んでいて詩篇の２３篇を思い出しました。２３：４**「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」**。たとえどのような暗闇の中を、断崖絶壁のところを歩んだとしても、私は恐れません、私は心配をもちません、私の心は平安に満たされています、羊飼いであるあなたが私の横にいてくださるからと。ダビデはよく分かっていたのです。神が私を導いてくださるということを、私を義の道へと誘ってくださることを。その中には暗く冷たく険しい道があったとしても、そのときには神が私の横にいてくださるから、私は恐れないと言います。聖書はそのようなたとえに満ちています。アブラハムに対して神は同じことを言われました。ヤコブにも、モーセにもヨシュアにも言われました、「恐れるな、私があなたとともにいる」と。神は私たちに保証してくださっているのです。私たちが神の前に従順に歩んで行くときに、神は私たちを確かに守り、助け、導き続けてくださるのです。私たちのこの地上でどれほど大きな安らぎを与える人よりも、もっと大きな安らぎを与える方が私たちにはいるのです。その方が私たちとともにいてくださるのです。平安を得るために何が必要だと思いますか？心からの平安をもってこの生涯を過ごして行くために、一体私たちには何が必要なのでしょう？いろいろな条件がありました。聖書的喜び、寛容な心、人生に対する正しい対応がありました。それをしっかり準備している人には神は約束を与えてくださいました。平安があると。それを継続して行くために私たちは聖書的にものを考え、聖書的な行動を実践して行くときに神は私たちに保証をくださいました。あなたとともにいると。でも、そのすべてを通して神が圧倒的な形で私たちに教えてくださることは、「わたしがともにいるから大丈夫だ」ということです。そのことに私たちは心からそうだ！と言って神に信頼するのです。クリスチャンは平安に満ちた人生を送ることなどできないという理由を見つけることができるでしょうか？

二つのことを断言させてください。一つは、もし皆さんが神が皆さんに行きなさいと命じる人生を生きることがなければ、別の言い方をするなら、皆さんが罪を犯しているなら、皆さんの心には決して平安が満ちることはありません。もうひとつ、その逆で、もし皆さんが神が望まれるように生きるなら、皆さんのうちには神の平安が溢れ流れます。この学びをしている間ずっと、私の中には一つの讃美歌が流れていました。その歌詞はこのようなものです。「私の希望はほかの何にもなく、ただイエスの血と義の上に築かれています。たとえどれほど甘く、麗しい思いが私の周りにあったとしても、私はそれを信用しません。私が信頼するそのすべてはイエスの御名のうちにあるからです。」、２番の歌詞は「暗闇が御顔を隠すようなときでも、私は主の変わらぬ恵みに安らぎます。荒れる強い暴風雨の中でも私の錨は私を揺るがさないのです。主の誓い、主の契約、主の御血が圧倒するほどの洪水の中で私を支えてくださいます。私の霊はたとえ周りのすべてのものが崩れ去ったときでも、主のうちに希望を見つけ、より頼んで行きます。」、コーラスの部分は「キリストという堅強な岩に私は立っています。他のすべての地は流砂のようなものです。」、これは「わが君イエスこそ救いの岩なれ」という讃美歌です。私はクリスチャンですと言われる皆さんは、この決して流れ崩れることのない確かな岩の上に立っておられるのです。この方を知りこの方に従順に歩んで行くなら、皆さんはどのようなところを通っても決して揺るがされることなく、平安に満ちた人生を送ることができるのです。そのような生き方をしたいと私たちはそう願っているから神に信頼しつつ生きて行きましょう。